

# 光源氏の須磨退居について

——須磨の巻の叙法の抒情性とその問題点——

武原弘

光源氏の須磨退居の原因が何であったかについては、古来いろいろと論じられてきた。特に多屋頼俊氏の一連の論文が<sup>(註1)</sup>あり、それに対する批判を含めて緻密な考証をされた阿部秋生氏の研究<sup>(註2)</sup>によって、問題の焦点はいっそうはっきりしてきた。他にむしやこうじ・みのる氏、清水好子氏、中村良作氏ら<sup>(註3)</sup>によって注目すべき独自の視点からの考察が加えられたこともあり、われわれには極めて示唆深い研究がたくさんみられるのである。

ところで、光源氏の須磨行きが自発的退居であったのか配流であったのか、あるいは、源氏はその時除名処分を受けていたのかどうか、などの諸点については、依然として解決が得られておらず、このテーマに関する研究では当面の課題となつてはいるが、従来の諸説を大局的にみると、退居の原因については、現段階において、一応の了解点に達していることがほぼ認められるのである。例えば、「源氏物語必携」<sup>(註4)</sup>には「朧月夜との密通をその現われとして、謀叛の意ありと弾劾され、春宮に累の及ぶをおそれた源氏がみずから須磨へ身を退いた、おりがおりだけに、人々は流罪同様に見た」と述べ、これを「一応妥当な見解」としている。この見解は、かつて多

光源氏の須磨退居について

屋氏が「源氏が須磨へ引退せられたのわ決して婦人問題のためではないのであって、弘徽殿の太后等が、源氏にわ皇位お左右しようとする野心がある、とゆう理由で、先ず源氏お流罪にし、次に春宮お廢しようとしたので、源氏わ先手を打って、流罪の事が決しない先に引退せられたのである」と論じられたところと基本的には同じ立場に立っており、現今においてこれを定説とはし難くなお多くの異説があるけれども、かなり一般的な見解として認められているようである。この見解の場合、光源氏退居の原因はあくまでも政治的問題であるとして解釈されており、しばしば論点になる朧月夜尚侍事件や藤壺事件までもが、その政治的問題の中に包摂されたものとして取り扱われ、それらの事件のもつ倫理上の問題性を退去の原因と結びつける立場は背後に押しやられしまつている。

光源氏退居のいわゆる政治的原因説は、本文に即して検討してみても極めて妥当な解釈である。作者は、早くから須磨の巻における源氏退居の事件を構想していたものと考えられ、花宴の巻からそれを作品内部に伏線化し、特にきわだつてそれが顯著になるのは賢木の巻からである。

桐壺院の崩御を機として、左大臣方の政治権力は急速に失墜し始め、右大臣や弘徽殿女御方が優位を占め始めて、源氏の身边には不

都合な事ばかり重なるようになる。弘徽殿方からは「白虹日を貫けり。太子懼ちたり」と邪推されたりして源氏は情勢の險悪化を悟るが、そういう情勢下で源氏と右大臣の娘臙月夜尚侍との秘密が発覚し、源氏失墜を謀る弘徽殿女御にとっては絶好の口実が得られたわけである。これらの事情が、賢木の巻で非常に精確でリアルな視点と描写によって展開されているが、須磨の巻はこれを受けて源氏の退居を描くわけで、その原因が右のような源氏をとりまく現実的政治的情勢の中に求められるのは当然のことだったのである。

しかし、この政治的原因説がそれなりの貴重な成果をもたらす一方で、同時に新たな問題点もはらんできていることも注意すべきである。例えば、藤壺事件や臙月夜事件には政治的問題の追求だけではなく切り切れないものが残るとか、須磨の巻で特に顕著な抒情味豊かな文芸性浪漫性が、右のような写実的手法による源氏退居までの描写とどのように結びついているのか、などの諸点である。私はいま、後者の問題を考察してゆきたいのだが、素朴な感想から述べてみても、須磨の巻は著しく「あはれ」の情趣が豊かである。この巻は古来名文のほまれ高いものであり、無名草子に「須磨、哀れにいまじき巻なり。京を出で給ふ程の事ども、旅のすまひの程いと哀れにこそ侍れ」とあり、また、この巻のしみじみとした悲愁の情感についての研究や鑑賞も多くなされている。例えば、重松信弘氏は、「泣く」とか「涙」とか「月」とかの用語をとりあげて、この巻における豊かなしかも独特の悲愁の情調を分析し、論証されている。<sup>(註)</sup>しかし、一方で光源氏の須磨退居の事件は非常に写実的現実的な背景を有しているとされ、その原因が政治的な問題であることの究

明はもとより、これを構想した作者の意識には、過去のまたは当時の史実がモデルとして在ったとの立場から、古来、準拠の問題としてとりあつかわれてきたのである。阿部氏のように「非常に抒情的なものやうでありながら、一方ででは非常に緊密に現実的な条件を踏まへた写実的な描写である」とか、むしろこうじ氏のように「光源氏の須磨うつりは（中略）当時の読者だったら、そのすさまじさがピンとくるだろうと思われるくらい、写実的な政治情勢の反映のうえにくみたでられています」とか説いて、この巻の写実性を強調する人が多いように見うけられる。

このような抒情的浪漫的描写態度と現実的写実的描写態度とは、互に相反する側面とは必ずしも言えないで、むしろ相互依存的な機能を發揮するものであるかも知れないが、例えば、いま問題にしている光源氏の須磨退居に即して言えば、このような政治的事象を形象化するための叙法がどのように抒情的描写法になり、なぜそういう叙法が用いられたかという問題、または、春宮の停廢にも絡んでくる当時の重大な政治問題をなぜこのような描写で、このような構想で描かなければならなかったかという問題は、検討に値する重要な問題である。村井順氏は、「通り源氏謫居の理由を考察されたあと、右に述べた二側面を指摘して「創作態度における情趣主義と現実主義との相剋」と評し、なおかつ「読者を偽瞞する創作態度」とされているが、ともあれ、光源氏退居の原因が政治的なものであればあるだけ、それを畳みこみ包みこんでしまった抒情的描写手法については、単に手法上の問題のみならず、須磨の卷明石の巻を含めての、源氏物語の本質にかかわる問題として考えたい。

改めて思うに、光源氏ほどの人物が落外に退去する大事件について、その原因究明が今日もなお諸説を生んでいる事実をはじめ、須磨の巻に入る退居の原因が俄然ばやけてきて「必ずしも明らかに語られていない」とか、「表現は間接的で曖昧ですから、その語句のひとつひとつをとりあげていくのでは、論議の解決はのぞめ」ないとか言われること自体が実は大きな問題ではなからうか。端的に言つて、光源氏の須磨退居の原因はなぜわかりにくいのか、という問題になる。そのわかりにくさの由来を追求して、原因論の根拠を再検討することによつて、作者が須磨の巻で意図した主題が何であるかを明らかにし、作者はなぜ須磨事件を書いたか、その本質を知りたいのである。

私は、本文に密着して微視的な立場から須磨の巻の叙法の特徴と問題点を考察してみたい。

## 二

まず須磨の巻の冒頭文の解釈から入ろう。

世の中いとわづらはしく、はしたなき事のみまされば、せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさる事もやと思しなりぬ。

これは、「世の中いとわづらはしく、はしたなき事のみまさる」というのが、概して賢木の巻の内容——弘徽殿女御の光源氏に対する政治上の陰謀や圧迫（既述）——をさしていることは、物語の筋の展開からみてほぼ確かである。しかし、「わづらはし」「はしたなし」といような心情語表現は、事件の経緯を現わすには不適當であり、

光源氏の須磨退居について

意味としても非常に抽象的観念的である。こういう語によつて、賢木の巻の内容をなした政治的条件を踏えた写実の世界が、果してどれほど正確に表わし得るか。読者は、この冒頭の一文で光源氏の退居の理由をどの程度明確に理解することができたか。

さらに厳密にみると、この「いとわづらはしく、はしたなき事」が、具体的にはいかなる事柄を内容としている叙述か、諸説とも必ずしも一致してはいない。大別して次の三つの解釈があると考えられる。

(Ⅰ) 葵の上の父左大臣との会話の中に「さしてかく官爵を取られず、浅はかなる事にかがづらひてだに、公のかしこまりなる人の、現ざまにて世の中あり経るは、咎重きわざに他の国にもし侍るなを」とあり、紫の上との会話の中に「公にかしこまり聞ゆる人は、明らかなる月日の影をだに見ず、安らかに身をふるまふことも、いと罪重かなり」とか、源氏の弟營兵部卿宮・三位中将が訪れたとき「位なき人はとて、無紋の直衣、なかなかいとなつかしきを著給ひてうちやつれへ給る」ともあり、須磨に退居後源氏のことを歎き惜しむ人々が多いにつけて、弘徽殿女御は「公の勲事なる人は、心に任せてこの世のあちはひをだに知ること難うこそあなれ」と言っていることなど考察して、この「いとわづらはしく、はしたなき」という部分は、官位を剝奪されたり（異説もあるが）、遠流の噂が立ったりした当時の政情を指していると考えられる。

(Ⅱ) この部分は、賢木の巻に書かれている弘徽殿女御の源氏に対するいやがらせ——「院のおはしましつる世こそ憚り給ひつれ、后の御心いちはやくて、かたがた思しつめたる事どもの報いせむと思

すべからず。事に触れてはしたなき事のみ出で来れば、かかるべき事とは思ししかど、見知り給はぬ世の憂きに、立ちまふべくも思されず。左の大殿も、すさまじき心地し給ひて、ことに内裏にも参り給はず。故姫君を、引きよぎてこの大将の君に聞えつけ給ひし御心を、后は思しおきて、よろしうも思ひ聞え給はず。」とあり、また、帝と源氏が春宮のことにつけて話を交わして退出しようとするとき弘徽殿女御の兄藤大納言の子頭の弁に、「白虹日を貫けり。太子懼ちたり」と諷せられたり、朧月夜尚侍に密通したことが露見した折弘徽殿女御は「いとどいみじうめざましく、このついでにさるべきことども構へ出でむに、よき便りなり、と思しめぐらすべし」という、そういう政情であつた——などを指すと考へる。

(Ⅲ) 桐壺院崩御以來弘徽殿の源氏に対する圧迫を描いた賢木の巻から須磨の巻の冒頭に入るまでの約九か月の間(院崩御後第四年目の除目、司召の時の描写が省かれて)に起つたであらうと思はれる事情(冷遇)をさすと考へる。

(Ⅰ) の除名処分も(Ⅲ) に述べた期間にあつたと考へられるから、これは一説に統合できるようにも考へられるが、須磨の巻の冒頭の部分では(Ⅰ) の内容は読者にはまだわからないはずであるから、(Ⅲ) と區別して考へたい。(Ⅰ) は、一応適當な解釈にも思へるが、しかし、賢木の巻の末尾の叙述(前出)や、この冒頭文で「いとわづらはしく、はしたなき事のみまされば」(傍点稿者以下同じ)とあり、さらに、賢木の巻の内容だけから源氏の退京という大事件が起つたと考へさせるには無理な点もある。(Ⅱ) や(Ⅲ) は、いずれも事情を読者に推測させる(または後になつてから明

らかにするがいまは漠然としか描写しない)筆法だが、これでは源氏退京の理由(原因)は具体的に少しも解らないことになる。

玉上琢弥氏は「右大臣が政治的優位を占め、それとは逆に左大臣方が失墜して行く様子を見て来た読者、さらには朧月夜尚侍との一件が発覚するまでにしたことを見て来た読者は、すみやかに事の内容を察知する」と述べられるが、<sup>(論16)</sup> どれだけ具体的に事の内容がわかつたものかについては大いに疑問が残る。要するに、光源氏退京の原因として賢木の巻の内容をそれ自体のみを考へることは疑問だし、賢木の巻以後須磨の巻冒頭の部分までの期間に起つたこと(本文には省いてあるが、源氏の除名処分があつたと解釈する)を想定すれば、多屋氏の言われるように、それほど大事な事が本文に省かれるはずはないし、仮に除名処分ではなく単なる冷酷な取扱いと解するとした場合でも、源氏が退京して須磨へ下向する理由としては、読者にそれとはつきりわかる具体的な理由の叙述がなくてはなるまい。蓋しこの冒頭の部分ではその理由が明らかに読者にわかつていなくてはならないような叙法に本文は書かれていゝ。と言ふのは、この冒頭文に続いて、

かの須磨は、昔こそ人の住処などもありけれ、今は、いと里離れた、心すくくて、海上の家だにまれにぞ聞き給へど……(以下略)と、早くも行く先の選択の場面であり、続く描写は、紫の上をはじめ親しかった人々との訣別を惜しむ心情が中心で、さらに続いては、

三月廿日あまりの程になむ、都離れ給ひける。人に今としも知らせ給はず、ただいと近う仕うまつり馴れたるかぎり、七八人ばかり

り御供にて、いとかすかに出で立ち給ふ。

とあって、源氏はいよいよ出発しているのである。この冒頭で源氏の退京の理由が明瞭でないとするれば、この叙法は著しく飛躍したものであるといわなくてはなるまい。

要するに冒頭の部分で作者は光源氏退京の理由を一応は叙しているように見えるが、具体的な内容は少しも語ってはいないのである。

また、右に引いた源氏の出発の場面の描写は、伊勢物語東下りの京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。

の描写に非常に似た趣きであり、先に須磨の名をあげて「昔こそ人の住処などもありけれ」とあって、在原行平の故事を連想させるるところと相まって、全体に文芸的発想の型式を踏んだとみられる。冒頭の段でこのような文芸的抒情的発想型式を用いたことは、おそろくこの巻全体の特質を決定的ならしめる要因となっているであろう。それは、賢木の巻に顕著だった写実的手法とは極めて対照的であり、作者の文芸意識においても、賢木の巻花散里の巻から須磨の巻に入る過程の中で大きな転換（断絶といってもよい）があったとみるべきであろう。端的に言えば、賢木の巻の政治的世界を「わづらはしく、はしたなき事」という心情語で把えようとするところに象徴される転換であり変化である。おそろく作者は写実的世界の中の光源氏像を物語の浪漫的抒情の世界の光源氏像へと再創造しようとしているのであろうが、このことは以後に展開される叙述態度にいつそう明らかに看取されるのである。

光源氏の須磨退居について

### 三

ところで、右に述べたように、須磨の巻の冒頭文はあまりに心情語表現法に過ぎており、抽象的観念的でさえあるため、光源氏の退京の理由を語るに、その具体的内容がわかりにくい表現であったが、このような叙法が物語叙法として許容されていたとすれば、それはどういふ事情によるのであろうか。それに関して私は本文の具体的叙述から次の三つの場合を仮定することができる。

第一の仮定は、源氏の退京の理由は前の賢木の巻などから既に十分納得できるところだとする考えである。しかし、この考えは、本文を細かくみると誤りであろう。物語の本文は源氏が退京を決意するまで、賢木の巻の内容の他にもっと重大な何かがあったことを暗示しているからである（前述〔Ⅰ〕参照）。

第二の仮定は、この冒頭文で事の内容が全て理解できないとして、作者は後で徐々にそれを明らかにするであろうと読者が期待していたとする考え。その中で、源氏の退京の原因もはっきりするであろうと予想されていたのである。はじめ事情を大まかに叙し終って、後で再びもとに戻ってそれを細かく詳しく叙していくという手法は、この作者のよく用いる叙法である。事実、この場合もそうになっている。後の叙述から、源氏が除名処分を受けていたこと（前述）、遠流に処せられるよう決定していたことなど含めて、源氏の出発前の様子が再度細く描かれている。この細叙によって冒頭の部分の意味内容が徐々に解明され、源氏退去の理由が判明するというわけである（前述〔Ⅰ〕参照）。はじめに事情を大まかに説明し終わ

り、再びもとに戻ってそのことを細かく詳しく叙してゆくというこの手法を、玉上氏が物語音読論に結びつけられているのは示唆深いとして、ここで問題となるのは、その手法によって果して退去の理由が具体化し現実的背景をもつものとして説得力をもつようになっているかどうかである。源氏と左大臣との会話に「さしてかく官爵を取られず（下略）」（前出）とか「遠く放ち遣はすべき定めなども待るなるは、さま異なる罪に当るべきにこそ待るなれ。濁りなき心に任せてつれなく過し侍らむもいと憚り多く、これよりおほきなる恥に臨まぬ先に世をのがれなむと思ふ給へ立ちぬる」とか叙せられて、源氏の退京の理由もいくらか細叙されていることは認められるが、他の紫の上、麗景殿女御、朧月夜尚侍、藤壘、故院（山陵）春宮、王命婦らとの惜別の場面で、源氏の退京の理由は殆ど話題にならないで、あたかも退京が自明のこととして描かれているようにさえ見られる。また、この細叙の手法は、源氏の退京の理由を視点を変えて写實的に描写していく、というふうには少しも機能しておらず、むしろ、物語の場面性を強調し、そこに和歌の贈答による抒情的雰囲気をも出し出すことに効果的に機能しているように思われるのである。場面は細分され精密になるが、それが重層的構成的にはなく、平面的反復的に細叙されるばかりで、村井順氏が循環描写だと指摘される所以ともなっている。細叙法とは、まさに場面の細叙であり、抒情の精叙の方法に他ならない。

第三の仮定は、この冒頭文だけで読者は満足することができたのではないかという考え方である。この冒頭文は既述のようにきわめて漠然とした内容しか表現し得ていないが、当時の読者にとって

は、政治上の問題など詳細に具体的に語られる必要は少しもなかった。ただ宿命的な対立関係にある弘徽殿女御と光源氏の関係が、感覚的に印象づけられさえすれば、しかも光源氏に同情をよせたくなる関係として設定されていさえすれば、正確な意味での政治的問題の実体など実はどうでもいい問題であった。光源氏がたとえどのようなひどい仕打ちを受けていようと、そのひどさの状況を感情の世界で気分的に把えるだけで、あとは源氏と共感するばかりが彼らの物語享受の心理的実態であった。無論、源氏物語には強靱な写実精神が貫通しているし、紫式部自身が没落する当時の貴族社会を厳しい批判の眼でみつめていたこともよく指摘されることだが、当時の時代社会の中で女性があつた政治意識にはやはり限界があつたし、その意味で光源氏の須磨退居事件がその背景として史実を材にしていることも事実だとされながら、一方で、きわめて物語的な構想・手法を用いていたことも確かなところなのである。それは一人紫式部の政治意識や文学的資質に関わるものではなく、当時の時代意識として一般的だったのである。

以上の考察によつて、私は、須磨の巻における手法の抒情性浪漫性を明らかにすることができた。この巻に関する限り、作者の描写意図は光源氏の退去の政治的原因を追求描写することにはなく、専ら離京に直面した光源とその愛人たちとの悲哀の情感描写にある。極言すれば、光源氏の退京の原因は作者にも読者にもどうでもよい問題であつたのではないか。このような叙情本位の描写から源氏退去の政治的原因を抜き出してみたとところで、それは解釈上、物語の筋立てを明らかにするために必要なことではあつても、原典

に即した解釈とは言い難い。作者にとって政治的原因は確かにしつかりと見据えられてはいたであろうが、そのような写実的世界の中で物語を展開することは物語の手法上ふさわしくない。そういう政治的社会的現実を「わづらはしく、はしたなき」という心情語で把握せざるを得なかった作者の意識も問題だが、われわれとして大切なことは、そういう世界を源氏と藤壺、朧月夜との恋愛の世界に溶解し、欲びと悲しみの感情の世界に再生することをこそ物語の中心としてその手法にまず注目し、その特質を読みとらなくてはならないことである。

光源氏が、引退してゆく目的地を須磨に選定するときの描写も、すこぶる物語的な発想によっているものと思われる。作者はこの巻の最初から物語的抒情美を主題としているようであるから、「おはすべき所は、かの行平の中納言の、藻塩たれつつわびける家居近きわたりなりけり。」と叙して、前後の描写とも少しの不自然さをもたず調和するのである。これを史実（例えば伊周隆家事件）に当てて類推し、実際は太宰権帥か何かに流された上須磨あたりにとどまることができた、というふうに解釈するのはおかしい。むしろ、「離京西下の底流には高明・伊周、須磨選択には行平、京よりの道行きは、業平・屈原・白楽天が意識されていたのではないか」とされるのが、まだしもの解釈である。しかし、さらにここで根源的な意識は、貴種流離譚の発想型式をその基調とする物語的浪漫的文芸意識なのであって、それは史実を超えモデルを超えて、ここに独特の物語上の超人光源氏像を現前せしめようとする意識である。

光源氏の須磨退居について

#### 四

光源氏の退居の原因論において、最も重大な問題は、本文の叙述の中に、光源氏を無罪と解釈すべき部分と有罪と解釈すべき部分とが共に存在している事実である。

かつて多屋氏は「物語の本文によれば、光源氏を決してそのようなこと（朧月夜との関係を罪と反省して引退する一稿者註）お言われず、飽くまで無実の罪であると繰り返し主張しておられる」から「物語の本文に、無実であると明に記されているのに、後世の読者が根拠も有たず、何々の罪によってなどと言うのわ、正しい解釈でわなない」と説かれ、無実の罪を強調された。

多屋氏はさらに無実の罪を負って須磨へ下向する光源氏の姿に、深い宿世の思想を読み取られるのだが、それはともかくとして、無罪の弁を本文から引くと「濁りなき心に任せてつれなく過し侍らむもいと憚り多く」「過ちなけれど、さるべきにこそかかる事もあらめと思ふに」「行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空なながめぞ」「雲ちかく飛びかふ鶴もそらに見よわれは春日のくもりなき身ぞ」「八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ」などによって源氏の無罪が主張されているし、さらに、明石の巻で故院の亡霊になやまれる朱雀院が「なほこの源氏の君、まことに犯しなきにてかく沈むならば、必ずこの報いありなむと覚え侍。今はなほ本の位をも賜ひてむ」と思われる叙述から、退居も無実の罪によっていたことが明らかである。

しかし、一方には、明らかに源氏が有罪の身であった（除名処分

を受けていた?)と解釈せざるを得ない叙述も多々見うけられ(本文前出)、多屋氏説に対する批判説の有力な根拠となつている。

私は一応多屋氏の説に賛成であるが、いちいちの引照は割愛し、今は別の観点からこの問題を考察したい。

本文解釈上問題はありますが、光源氏を無罪と解するにせよ有罪と解するにせよ、先のいずれの場合の叙述も、著しく抽象的平面的であることは注意すべきである。光源氏が無罪を主張するのは何に對してどう疑われたことについて無罪なのか。有罪とされるのはいかなる罪を犯したからであるのか。無罪であること(あるいは有罪であること)の情況<sup>(1)</sup>わが身の立場の情緒的な承認<sup>(2)</sup>ばかりを自他に主張し誇大に示そうとする源氏ではあるが、その情況を生来せしめたところの現実的条件や原因については、全くといつていいほどこれを問題にしていない。源氏自身による無罪の主張は、その場面の情趣に同化してはや感情的でさえあつて、政治的問題に對する理性的な認識の態度ではない。この点をさらに細かく検討してみよう。

まず基本的なこととして予め注意しておきたいことは、村井氏や中村氏の指摘にもあるように、源氏の無罪の主張が、すべて源氏自身の吐露した詞であるが、いづれも相手に向つての對話(歌の場合にも相手を意識し、相手に与えた歌)の詞であることである。両氏とも、この点から源氏の言葉に真意がないことを述べられ「王朝の社交辞令」だとか「復帰復活のための強がり、一種のジェスチャー」だとか評されるが、私はそう解釈する前に、ここで大切なことが確認されなくてはならないと思う。それは、源氏の無罪の弁が、全くその場その場における諸条件——それも強いていえば抒情的な言

語成立のための諸条件——に決定的に依存し、その場面の中でのみ具体的現実的な意義を有するという、きわめて実存的な言語理解を必要としているからである。だから源氏の詞には真意がない、とするのは飛躍であつて、その詞は一応額面通り受けとられるべきである。が、源氏の真意を表現しているとはいひながら、それがきわめて情緒的な雰囲気中で、むしろ、その抒情的悲愁感をいつそう高めるための一つの手段として、きわめて有効に叙せられているということである。源氏の無罪の弁が、ある特定の相手を前提として具体的な言語環境の中で扱えられるということは、換言すれば、これらの叙述は著しく場面的であるということであり、さらにそれらの場面全体の中に源氏の無罪の弁を位置づけて有機的・総合的に読みとられることが必要となつてくる。こういう視点の中で、源氏無罪の弁の叙述にまつわる抒情性を把えることができるのであるが、もっと具体的に、私は次の二点からこれを説明しよう。

第一には、源氏の無罪の弁が場面的に機能して源氏の悲劇的側面を強調し抒情的な雰囲気をもたせしめていること。第二には、同じ無罪の弁が何度も繰り返し叙されることによつてそれが全体基調となつてあらゆる場面の抒情の傾向を規定していること。

第一の場合、例えば、須磨に退居している光源氏を、昔の親友であつた頭中将(宰相)が訪ねる場面の中に「雲ちかく飛びかふ鶴もそらに見よわれは春日のくもりなき身ぞ」の歌があり、これに和して返した宰相の歌もある。ここで「くもりなき身ぞ」が源氏のわが身の潔白を主張した詞であることは無論だが、これをこの場面全体の主題の中に位置づけて解釈すると、悲哀感を主情的に強調するた



めの一つの手段として有効であつて、無罪であることの場合の具体的説明にはなりえていないことがよくわかる。この場面での主題は男性同志の友情の美しさであるが、京人宰相中将と異郷の海士光源氏との対照法がその情感を強調しているのである。源氏が無実の罪であればいっそうその悲劇性は高まるのであり、源氏に対する読者の同情は強まる。その悲劇性や同情からの感動こそこの場面での作者の主意であつたのである。ここではもはや、光源氏の須磨退居というまさに政治的事象が、雲に飛ぶ鶴のイメージに簡単に転化し、和歌による情感の吐露という詩的抒情的叙法をとることによつて、こまやかに共感されるのである。こういう場面の中に描かれた無罪の弁に、われわれはどれだけの写実的状况を理解しようとするのであろうか。他の例も同様である。

第二の場合、源氏の無罪の弁が既に引いて示したように何回も本文に繰り返されているのだが、このことは、一見、その退居の事態を十分に説き明かすためのもののようにでありながら、実は、原因追求の姿勢を次第に情趣的な次元へ導入していく機能をもっていると思ふ。既述のとおり、ここで作者は細叙の手法をとることによつて、源氏と愛人や知己の一人一人との別れの場面を細かく描いているが、それは光源氏の退居の理由を漸層的に立体的に描写していく機能をもつては来ず、同じ情趣の単調・平板な反復にすぎなかつた。それはまさに循環描写であつて、ただ源氏の相手を交えただけの同一情緒の並列にすぎない。その場面場面で源氏の無罪の弁が語られたとしても、その政治的背景の具体的状況が展開的に内容をみせるのではない限り、情緒的に訴える側面は強くなるが、単調さは

光源氏の須磨退居について

まぬがれない。少くとも賢木の巻の手法はこうではなかつた。このようにみてくると、須磨の巻が主題としてめざした抒情性浪漫性は非常に深遠なものがあつて、その手法もそういう情感の表現のためにのみ有効なものとなつていのである。われわれは、これをしも写実的手法と呼ぶべきであらうか。

## 五

既に触れた如く、須磨の巻は、その人事描写においても情景描写においても、しみじみとした豊かな悲愁の情調をその文芸的特質としている巻である。詳細は重松氏の考説に今はしたがいが、この抒情味豊かな文芸性は、須磨の巻の用語や文体の問題としてである以上に、その主題的精神としてもっと重要視されてよいのであるまいか。私はこれまで、須磨の巻の抒情性を特に叙法を中心に観てきたのであるが、他の要因として、この巻に頻出する挿入歌、引き歌の実態を分析することによつてもこのことは確認できるのである。註記の表にみられるように、須磨の巻における和歌の数は、他の巻にくらべて圧倒的である。これだけみても、和歌の世界——玉上氏によると「引き歌は、季節の叙景と盛り上がる抒情の場面にしきりに出る」もの<sup>(註21)</sup>とされる——がこの巻に占めている役割は看過できないのである。源氏物語の和歌が本質的にどういふ機能を果しているかについては、私も小考を公にしたことがあるが、必ずしも文芸的効果を盛り上げるといふ一面性ばかり強調はできないとはいふものの、和歌が本質的に備えている場面性、抒情性が物語の中で機能していることの重要性は、須磨の巻では決定的なものである。

以上の考察によって、私は一つの要約に達することができるように思う。つまり、須磨の巻の描写は著しく抒情的であり、それは描写手法の領域にのみとどまらず、作者が主題として意図した当のものにそのまま直結する。したがって、光源氏の退居の原因をこの巻の描写から究明することは、不可能とは言えないにしても、極めて困難かつ非能率なことではないだろうか。作者の意図及び読者の期待は、光源氏の退居という当時の大事件の原因追求にあるのではなく、退居という自明の前提に立ったところでの哀切なる悲愁の情感の共有という起点から、文芸的に趣深い須磨の海浜へと向って無限に広がってゆく。そのあわれの感動こそが、須磨の巻において作者がめざした最大の主題ではなかったか。

それにしても、作者は何故そのような抒情的描写をもって源氏の退居を描かなければならなかったのか。主人公を無実の罪に陥し入れてまでして、作者は何故、主人公を須磨へまで連れ出すのか。その理由の中で、物語という一つの芸術世界の創造にとつてそれが最も必然的なのか。最も肝心な研究課題はこれである。私はまだまだ問題の入口に立っている——恐らく、この須磨退居の事件は、物語の主人公としての完全無欠な人間像へと光源氏を理想化するための方法であったものと思われるし、それは、桐壺の巻のいみじき相人の予言の現実化という発想の中で、光源氏像をますます物語中の人物としてのイメージに近ずける方法でもあったものと予想されるのだが、そしていわゆる須磨事件が、全体として古代伝承物語型式に決定的に依存していると思うのだが——この問題については、いずれ別の機会に考察したい。本稿はその問題研究の方向の手がかりを

得るための予備的考察にすぎない。

- 註 1 「源氏物語の思想」(宝蔵館、昭27・4) 「光源氏伝の一節」(「国語と国文学」昭32・8) 「光源氏と朧月夜尚侍」(「国語と国文学」昭33・8) 「光源氏の須磨えの下の向について」(「国語と国文学」昭36・2) 註5、註15、註18もこれによる。
- 註 2 「源氏物語研究序説」(東大出版会、昭36・9)、註8もこれによる。
- 註 3 むしゃこうじ・みのる「法制史からみた光源氏の須磨行」(「国語と国文学」昭35・1) 清水好子「源氏物語論」(塙書房、昭41・1) 中村良作「源氏の須磨流論の真因」(「国文学」昭39・5)、註9、註12、註19、もこれによる。
- 註 4 秋山虔編「源氏物語必携」(学燈社、昭42・4)
- 註 6 重松信弘著「源氏物語の構想と鑑賞」(風間書房、昭37・2)、註11もこれによる。
- 註 7 古来、在原行平とか源高明とか藤原伊周とか周公などがモデルとしてあげられている。註2の文献に詳しい。
- 註 10 村井順著「源氏物語論」上巻(中部日本教育文化会、昭37・1) 註19もこれによる。
- 註 13 吉沢義則著「対校源氏物語新釈」巻二(平凡社、昭38・4) や、山岸徳平校注「源氏物語」巻二(日本古典文学大系、昭34・11)などが代表的、古註はほぼこの立場。
- 玉上琢弥著「源氏物語評釈」巻三(角川書店、昭40・5)もこの立場とみられる。註16

註 14 松尾聆著「全釈源氏物語」卷四（筑摩書房、昭36・8）  
 註 17 「源氏物語のモデル」（「国文学」昭34・9）

註 20

比(%)	ページ	挿入歌	引き歌	巻名
96	25	9	15	桐壺
71	52	14	23	帚木
83	12	2	8	空蟬
80	52	19	23	夕顔
85	56	25	23	若紫
88	34	13	18	末摘花
136	28	17	21	紅葉賀
118	11	8	5	紅花宴
97	48	24	23	葵
116	48	33	23	賢木
250	4	4	6	花散里
200	43	48	38	須磨
137	40	29	26	明石
87	33	17	12	滯標
70	24	6	11	蓬生
80	5	3	1	関屋
50	18	9	0	絵合
186	22	16	25	松風
75	32	10	14	薄雲
127	22	13	15	朝顔
50	53	15	12	少女
62	46	14	15	玉鬘
160	15	6	18	初音
138	21	14	15	胡蝶
71	21	8	7	螢
100	25	4	21	常夏
125	4	2	3	篝火
60	20	4	8	分野
36	30	8	3	行幸
87	16	8	6	藤袴
82	40	21	12	真木柱
90	21	11	8	梅枝
140	25	19	16	藤裏葉

（引き歌は「源氏物語事典」下巻（池田亀鑑編、東京堂昭38・4）の玉上琢弥氏ご執筆  
 「所引詩歌仏典索引（和歌歌謡索引）」の項に拠った。ページ数は日本古典文学大系本に拠った。  
 比(%)は（引き歌数+挿入歌数）/ページ数 の値である。

註 21

玉上琢弥著 「源氏物語評釈」別巻一（角川書店、昭41・3）

註 22 拙稿「源氏物語の和歌の機能について」（梅光女学院短期大学「国文学研究」第一号、昭40・11）

源氏物語の本文の引用はすべて池田亀鑑校註「源氏物語」（朝日新聞社刊）によった。

光源氏の須磨退居について